

原 著

## 大学生の精神健康調査

木下 清 島田 修 保野孝弘 綱島啓司

川崎医療福祉大学 医療福祉学部 臨床心理学科

(平成9年5月21日受理)

### A Survey of Mental Health of University Students

**Kiyoshi KINOSHITA, Osamu SHIMADA, Takahiro HONO  
and Keiji TSUNASHIMA**

*Department of Clinical Psychology  
Faculty of Medical Welfare  
Kawasaki University of Medical Welfare  
Kurashiki, 701-01, Japan  
(Accepted May 21, 1997)*

**Key words :** mental health, university students

#### **Abstract**

A questionnaire was prepared that contained UPI and other items concerned with the home and school lives of university students. Its' aim was to check their level of adaptation and mental health. Our subjects were 1 st and 2 nd year students at Kawasaki University of Medical Welfare. The questionnaires were given to the students at a class and collected at the same class on the following week. 604 questionnaires were returned.

The mean UPI score was 9.7. The scores were divided into two groups, the H group and L group. UPI scores of the H group were the mean +1 SD and the L group were less the mean -1 SD. In comparing the H group with the L group, we found that the H group had greater dissatisfaction with their parents and homes. They had conflicts with and were critical of their parents. Their attitude toward school was similar and they tended to have bad feelings about their school lives.

Next, we divided the students into the P and N groups. Members of N group had some traumatic experience in their past while members of P group did not. The P group

numbered 325 and the N group 279. In comparing the two groups, the findings were similar to results comparing H group with L group. In addition, the UPI scores of the P group were higher than the N group. Specifically, those students in P group who had gotten into a neurotic state, had suicidal thought, etc. had significantly higher scores than those in the L group.

## 要 約

大学生の学校および家庭への適応状況を調べ、精神的健康度をチェックする目的で、UPIを含む調査表を作成した。実施法としては授業時に配付し、つぎの同じ授業時に回収する方法による。対象者は川崎医療福祉大学の1, 2年生で有効回収数は604名であった。

UPIの訴え数平均値は9.7であったが、この値から訴え数の多い者89名、少ない者56名を選びそれぞれをH群、L群として、調査表の他の項目への応答を比較した。家庭生活上でH群は両親のしつけや接し方に批判または不満を感じ、それゆえ反抗・批判・無視という態度をとる者が多かった。学校生活でも友が少なく、友への感情も陰性または両面的であるとともに、学校そのものにも不満を感じ将来を「暗い」とする者が多かった。

つぎに調査表のなかの過去の問題状態にチェックのあった学生325名（P群）とチェックのない学生279名（N群）について、他の項目への応答を比較したところ、H群とL群の比較に類似の結果が得られた。なおUPIの平均値もP群が高かった。特に家出、いじめられ経験、ノイローゼ、自殺念慮の項では有意に高い。

その他各項目について、学科別、学年別、性別に比較を試みた。一貫して見られた傾向は2年生の方が、1年生に比べて特に学校生活に不満や不安を多く感じているらしいことであった。学科別の特徴は人数の少ない項目がいくつかあったので省略する。

## はじめに

本学も創立以来第3期の卒業生を1997年春に送り出した。この間学科の増設、大学院の設立が行われて学生数は飛躍的に増えつつある。一方、それに応じて不適応に陥ったり、精神障害になったりする学生も増加しているものと思われる。青年期はただでさえ身体的変化への対応や精神的自立に向けての困難な時期であるのに加えて、identityの模索などの現代的困難が加重されるゆえに、学生たちの中には傍目にはわかりにくい空虚感、疎外感、目的喪失感を抱いている者がかなりいるだろうと推測される。他大学でも事情は同様でさまざまな取り組みがなされてきた。たとえば大阪大学では、健康体育部の保健センターが、長年にわたり新入生の入学前にSCTとUPIとを記入させるという方法でデータを揃え、後の精神保健管理の参考資料にしている<sup>1)2)</sup>。その他多くの大学で入学直前ま

たは直後に質問紙による健康調査（狙いは精神保健が主である）を実施している。

本学は医療福祉の専門大学であるにもかかわらず、今だにこの種の方法をとっていないし、また学生の精神保健相談への組織的対応の態勢も整っていないと言いがたい。今回の調査はこれらの問題にひとつの資料を提供する目的でなされた。身体的疾病と同様に精神的不健康も早期に対応することが望ましい。入学時にある程度ではあるにしても、要注意学生を把握し、適切なホローが早くからなされるようになることを願っている。

## 方 法

### 1. UPI と調査表

#### 1) UPI (University Personality Inventory)

UPIは1966年に、全国大学保健管理協会に所属する全国の学生相談のカウンセラーと精神科医が中心になって、問題のある学生の「早期発

見早期治療」をめざして作成された「精神健康調査表」であり、60項目からなるかんたんな質問紙法で、応答は2件法による。項目の内容は人間関係不適應から心身症、種々のノイローゼに至る症候やそれらに親和性がある性格特性を記述したものである。結核が激減して以来、傷病による大学生の休学や退学の原因の第一位は精神障害であり、死因のなかでは自殺が多いこともあって、UPIは前述の大阪大学の例のように、かなりの大学で用いられているようである。

2) 調査表

調査表は木下、下仲(1982)によるもので<sup>3)4)</sup>、過去の問題状態に関する12項目(家出、万引き・窃盗、不登校その他)、家庭生活に関する14項目(両親のしつけのタイプ、本人の両親への感情、家庭の雰囲気など)、大学生活に関する10項目(友人の数、友人への感情、大学生生活の目標など)、人生観に関する7項目(将来の見通しなど)からなる。UPIと調査表との関連を多角的に検討したが、今回は紙面の都合上その一部しか報告できない。

2. 対象者と実施方法および調査期日

本学の1, 2年生を対象に、主として授業時に配布して、つぎの同じ授業時に回収するという方法をとった。記入不備のものを除いて604名のデータが報告の資料になった。なお調査は平成7年6月19日から6月29日までに実施した。

結 果

1. UPI 平均値とH群, L群の設定

1) 学科別, 性別のUPI平均値

UPI訴え数の平均値を学科別, 性別で示したのが表1 a, 表1 bである。全体の平均値は9.7で、たとえば阪大の1980年の10.4とほぼ同じ結果であった。学科別では臨床心理と保健看護でやや高く、健康体育でやや低い。女性と男性の比較では女性がやや高かった。

2) UPI H群とL群の設定

UPI平均値の9.7に1SDを加えて16.8以上の者をH群, 9.7から1SDを引いて2以下の者をL群とした。UPIは分布が左に偏るので、この設定には多少無理があるが、一応のめやすとした。その結果H群が89名L群が56名抽出された。なおH群の平均値は23.73, L群は0.61であった。

2. H群とL群の家庭生活および学校生活の比較

H群の平均値23.73は辻本らも指摘するようになりかなり高い<sup>5)</sup>。不適應が予想される値の者が20~30名いる可能性を示唆するものである。人格形成にかかわる家庭の役割は大きいので、家庭生活を中心に比較をした。その中から有意差のあったものをあげる。

1) H群とL群の家庭生活

比較の結果を表2 a, b, c, d, eにそれぞれ

表1 a UPI 訴え数平均値 <学科別>

	医療福祉	臨床心理	医療情報	臨床栄養	健康体育	感覚矯正	保健看護	リハビリ	全 体
n	168	79	101	71	66	53	28	38	604
平均値	9.9	10.1	9.9	9.5	8.2	9.6	10.8	10.0	9.7
SD	7.57	7.89	8.24	6.84	5.99	8.14	8.35	7.35	7.05

表1 b UPI 訴え数平均値 <男女別>

	男 性	女 性
n	108	496
平均値	8.5	10.0
SD	6.82	7.71

.05 < P < .10

表2 a H群とL群のしつけの型の比較

	厳格・過干渉	過保護・溺愛	放任	ふつう
H群	27	19	10	33
L群	6	2	5	43

P < .01

示した。H群はしつけの型では厳格・過干渉や 一方的、一方的に指示命令したり、期待をしすぎたりしがちになる。それに応じて本人も批判過保護・溺愛が多い。その表れとして両親の接

表 2 b 本人への両親の接し方の比較

		命令・指示的・ 一方的	世話やきだが 要求も通す	期待しすぎる	干渉せず好き にさせる	責任をもたせ 自由に	
父	H群	17	8	8	27	29	P<.05
	L群	2	4	3	11	36	
母	H群	15	7	17	14	36	P<.05
	L群	2	7	3	7	37	

表 2 c 本人の両親への感情

		尊 敬	親しみ	批判・反抗	避ける・無視する	
父へ	H群	21	28	23	17	P<.05
	L群	16	32	6	2	
母へ	H群	12	41	30	6	P<.05
	L群	8	40	6	2	

表 2 d 家庭環境〈両親の仲〉

	円 満	ふつう	不和・わからない
H群	25	38	26
L群	25	28	3

P&lt;.05

表 2 e 家庭の雰囲気

	明るい	ふつう	暗い・わからない
H群	30	41	18
L群	32	21	3

P&lt;.05

表 3 a 友人の数

	多い	ふつう	少ない・ほとんどない
H群	6	50	33
L群	14	41	1

P&lt;.01

表 3 b 大学生生活はイメージどおりであるか

	かなり・やや 一致している	どちらで もない	ややずれ ている	かなりず れている
H群	21	17	22	29
L群	29	15	10	2

P&lt;.01

表 3 c この大学の学生であることに誇りを感じるか

	非常に誇り である	少し誇りに 思う	どちらとも 言えない	少し劣等感 がある	非常に劣等感 を感じる
H群	14	16	34	16	9
L群	13	22	20	1	0

P&lt;.01

表 3 d 将来の見通し

	明るい	どちらとも 言えない	暗い
H群	13	36	40
L群	40	15	1

P&lt;.01

反抗が多くなり、無視し避けることになる。両親の仲についても「不仲」に見がちである。家庭の雰囲気も暗いとする者が多い。以上のH群の特性はL群には少ない。

2) H群とL群の学校生活

H群の学校生活はどうであろうか。その結果を表3 a, b, c, dに示した。H群には友が少なく、大学生活はイメージのそれに遠く、本学の学生であることに誇りをもてず、将来を暗いとしている者がかなりいることがわかる。この傾向はL群には少なかった。

3. 調査表によるP群とN群の設定

1) 調査表の問題状態のひとつにでも該当した者をP群としたところ、P群は325名となった。P群に入らない者をL群とした。L群は279名である。P群の方がL群よりも多いことは項目を見れば特に不思議ではない。たとえば「真剣に家出を考えた」経験を多くの青年がもっている

だろう。また万引きは今や都会の少年たちのスリル溢れる「遊び」となっていると聞いたらい過ぎだろうか。

2) P群, N群のUPI 平均値

(1)各群のUPI平均値：表4 aにP群とN群のUPI平均値を示した。P群がN群よりも有意に高いことがわかる。

(2)問題状態のUPI 平均値

問題状態別にUPI平均値を出したのが表4 bである。有意にP群が高かったのは「真剣に家出を考えた」、「家出を実行した」、「いじめられた」、「ノイローゼになった」、「真剣に自殺を考えた」の各項目である。なかでも平均値に大きな差があったのはノイローゼと自殺念慮の項目であるが、やはり問題の重要性を考えざるを得ない。「実際に自殺を試みた」者が19名いたことも見逃せない。

4. P群とN群の家庭生活の比較

P群とN群の家庭生活を比較したのが表5 a, b, cである。ここでもH群とL群に類似の傾向が見られた。P群の方でしつけの型にやや偏りがあるらしい。両親の仲を不和と感じ、家庭の雰囲気も暗いと感じている者も多いようである。

5. 調査表のまとめ(学科別, 性別, 学年別)

1) 問題状態の学科別比較

問題状態で頻度の高い4項目について学科別

表4 a P群とN群のUPI 平均値とSD

	平均値	SD
n = 604	9.70	7.05
P群 = 325	10.79	8.21
N群 = 279	7.32	6.35

P < .01

表4 b UPI 平均値の比較<問題別>

問題行動	人数(率)	該当する行動があった者のUPI 平均値(SD)	その行動がなかった者のUPI 平均値(SD)
真剣に家出を考えた **	157(26.3)	12.25(8.39)	8.09(7.00)
家出を実行した **	51( 8.5)	11.96(9.00)	8.93(7.42)
万引き・窃盗をした	79(13.2)	10.38(7.70)	9.00(7.60)
理由なく学校を2週間以上休んだ	28( 4.7)	12.18(8.18)	9.04(7.55)
いじめられた **	133(22.2)	10.92(8.37)	8.69(7.31)
不良グループに入ろうと考えた	16( 2.7)	12.38(8.73)	9.10(7.56)
不良グループに入っていた	19( 3.1)	9.79(7.94)	9.16(7.60)
ノイローゼになった **	90(15.2)	13.35(8.71)	8.44(7.15)
真剣に自殺を考えた **	95(15.9)	13.62(9.17)	8.36(6.98)
実際に自殺を試みた	19( 3.2)	12.26(9.21)	9.08(7.53)

\*\* P < .01

に比較したのが表6である。各項目について検討すると、「真剣に家出を考えた」のは率的に保

健看護学科が高い。万引き窃盗は健康体育、いじめの被害は感覚矯正、ノイローゼは臨床心理

表5a P群, N群のしつけの型の比較

	過干渉・厳格	過保護・溺愛	放任	ふつう
P群	93	52	38	141
N群	52	30	16	182

P<.01

表5b P群, N群の両親の円満さの比較

	円満	ふつう	不和・わからない
P群	120	137	64
N群	123	133	27

P<.01

表5c P群, N群の家庭の雰囲気比較

	明るい	ふつう	暗い・わからない
P群	129	141	44
N群	132	141	17

P<.01

表6 過去の問題のうち頻度の高いものの学科別比較(上段は人数 下段は比率)

	医療福祉	臨床心理	医療情報	臨床栄養	健康体育	感覚矯正	保健看護	リハビリ	計
家出を真剣に考えた	42 25.0	22 27.8	28 27.7	13 18.3	17 25.7	10 18.9	14 50.0	11 28.9	157 25.9
万引き・窃盗をした	24 14.3	18 22.7	8 7.9	2 2.8	18 27.2	3 5.6	2 7.1	4 10.5	79 13.0
いじめの被害者になった	43 25.6	21 26.6	16 15.8	12 16.9	14 21.2	16 30.1	4 14.3	6 15.7	132 21.9
ノイローゼ状態になった	22 13.1	20 25.3	15 9.9	9 12.6	10 16.1	5 9.4	8 28.5	6 15.7	90 14.9
総人数	168	79	101	71	66	53	28	38	604

表7a 本人に対する父親の態度<男女別>

	命令的・指示的	世話をやきたがる	無理解・批判的	期待しすぎる	無干渉・放任的	責任をもたせるが自由	その他	無回答
男	13	7	3	11	19	47	4	4
女	37	42	21	30	138	188	20	20

表7b 本人に対する父親の態度のまとめ<男女別>

	世話をやく・無理解・無干渉・放任的	命令指示的・期待しすぎ・自由・その他
男	29 (26.9)	79 (73.1)
女	201 (40.5)	295 (59.5)

P<.01

表 8 a 本人に対する母親の態度 <男女別>

	命令的・指示的	世話をやきたがる	無理解・批判的	期待しすぎる	無干渉・放任的	責任を持たせるが自由	その他	無回答
男	10	21	3	11	16	42	4	1
女	33	49	35	42	91	222	27	7

表 8 b 本人に対する母親の態度のまとめ <男女別>

	命令的指示的・世話をやく・期待しすぎ	無理解批判・無干渉放任・自由・その他
男	42 (38.9)	66 (61.1)
女	124 (25.0)	372 (75.0)

P<.05

表 9 a 友人の数 <学科別>

友人数	医療福祉	臨床心理	医療情報	臨床栄養	健康体育	感覚矯正	保健看護	リハビリ
多い	28	9	19	8	19	8	4	8
普通	110	57	68	55	40	41	21	26
少ない他	30	13	14	8	7	4	3	4
総数	168	79	101	71	66	53	28	38

と保健看護で高率であった。しかし注目すべきは問題状態の経験をかかなりの者がしていることである。「ノイローゼ状態になった」者も100人に15人弱はいるということになる。

2) 本人に対する父親の態度 (男女別)

本人に対する父親の態度を表7 a, bに示す。一般に父親は年ごろの娘に接近と回避の矛盾した感情を抱く。それが表れていると言えるのではないだろうか。世話をやきたがる傾向も対息子よりも強いし、逆に無干渉・放任も同様である。

3) 本人に対する母親の態度 (男女別)

本人に対する母親の態度を表8 a, bに示した。母親もなかなか息子離れができないと言われるが、その傾向が表れているように思う。息子に期待し、指示・命令をする一方では世話をやく傾向がある。

4) 友人の数 (学科別)

友人の数はどの科でも「ふつう」が多い。しかし表9 aを見ると臨床心理と健康体育とで差がありそうなので表9 bにまとめた。一応有意差

表 9 b 友人の数<学科別で有意差のあったもの>

	多い	少ない
臨床心理	9 (11.4)	13 (16.5)
健康体育	19 (28.8)	7 (10.6)

P<.05

が見られる。

5) 友人への感情

友人への感情を表10 a, bにまとめた。陽性感情がどの科でも多い。しかし表bのように、臨床心理と保健看護で医療福祉よりも陰性感情や両面的感情を示す者が多かった。「ノイローゼ状態になった」者が心理と看護に多かったことと関係があるのではないだろうか。

6) 大学生生活の目標 (学科別)

大学生生活の目標を何においているかのまとめを表11に示す。括弧内の順位を見ると臨床心理と医療福祉が同じであり、臨床栄養と感覚矯正がほぼ同じである。前者は人格の陶冶を指向し、後者は職業に指向していると言えるだろう。不

表10a 友人に対する感情〈学科別・複数回答〉

	医療福祉	臨床心理	医療情報	臨床栄養	健康体育	感覚矯正	保健看護	リハビリ
陽性感情 尊敬する・頼りになる・楽しい・認めてくれている	400	177	231	160	150	133	57	90
陰性感情 批判的・物足りない・競走心をもつ・反発する・他	45	28	30	24	25	15	8	15
両価的 時にはわずらわしい・他	28	24	15	15	6	8	10	4

表10b 友人に対する感情〈差のあった学科〉

	陽性感情	陰性感情	両価的・他	
医療福祉	400	45	28	P<.05
臨床心理	177	28	24	
医療福祉	400	45	28	P<.05
保健看護	57	8	10	

表11 大学生生活の目標を何においているか〈括弧内は順位〉

	医療福祉	臨床心理	医療情報	臨床栄養	健康体育	感覚矯正	保健看護	リハビリ
良い友人を得たい	39(3)	11(3)	33(1)	15(3)	16(2)	7(3)	5(3)	6(3)
広く深い教養を	40(2)	23(2)	23(2)	14(4)	17(1)	7(3)	9(1)	6(3)
人格をみがく	56(1)	30(1)	20(4)	17(2)	9(4)	13(2)	8(2)	10(2)
希望の職業につく	28(4)	11(3)	21(3)	21(1)	16(2)	22(1)	4(4)	15(1)
趣味技術をつける	4(5)	2(5)	2(5)	3(5)	5(5)	2(5)	1(5)	1(5)
その他, 無回答	1(6)	1(6)	2(5)	1(6)	3(6)	1(6)	1(5)	0(6)

P&lt;.01

思議なのは保健看護で、教養を深め人格をみがくことへの指向が強い。看護の道に入ることが決まっているからであろうか。

7) イメージしていた学生生活との一致度(学科別, 学年別, 性別)

ほとんどの学生が入学前に学生生活へのイメージをもっていただろう。イメージと現実が一致していれば学生生活に少なくとも失望しないですむ。その一致度を学科別に示したのが表12a

である。「ずれている」で医療情報が最も高率だった。低率なのがリハビリであり、そのリハビリは「一致している」で最も高率だった。看護、福祉がリハビリに次いで高率である。

学年別の一致度を表12bに示した。学年が進むにつれて一致度が低下していくのがわかる。ただし一般に2年生はたるみの時期であることも関係しているのかも知れない。

表12cに一致度の性別比較を示した。女性の



表12a イメージした学生生活と一致しているか<学科別, 実数と率>

	医療福祉		臨床心理		医療情報		臨床栄養		健康体育		感覚矯正		保健看護		リハビリ	
一致している	71	42	26	33	17	17	16	23	20	30	15	28	12	43	17	45
どちらでもない	41	24	18	23	15	15	17	24	17	26	12	23	7	25	10	26
ずれている	56	33	35	44	69	68	38	54	29	44	26	49	9	32	11	29

P<.01

表12b イメージした学生生活と一致しているか<学年別>

	一致している	どちらでもない	ずれている
1年生	135(39.9)	79(23.4)	124(36.7)
2年生	57(21.4)	58(21.8)	151(56.8)

P<.01

表12c イメージした学生生活と一致しているか<男女別>

	一致している	どちらでもない	ずれている, 他
男性	46(42.6)	19(17.6)	43(39.8)
女性	144(29.0)	117(23.6)	235(47.4)

P<.05

表13a この大学の学生であることに誇りを感じるか<学科別 実数と率>

	医療福祉		臨床心理		医療情報		臨床栄養		健康体育		感覚矯正		保健看護		リハビリ	
誇りを感じている	87	52	39	48	29	29	28	39	37	56	34	64	13	46	20	53
どちらでもない	62	37	32	41	50	50	32	45	21	32	18	34	11	39	16	42
劣等感を感じている	19	11	8	11	22	22	11	16	8	12	1	2	4	14	2	5

表13b この大学の学生であることに誇りを感じるか<学年別>

	誇りを感じる	どちらでもない	劣等感を感じる
1年生	188(55.6)	118(34.9)	32(9.5)
2年生	98(36.8)	125(47.0)	43(16.2)

P<.01

方に不一致感をもっている者が多いことがわかる。男子学生の方がより現実的で現状を肯定しやすく、別の言い方をすれば、あきらめがつきやすいのではないか。

8) 本学の学生であることに誇りを感じるか(学科別)

この項目への応答は当然ながらイメージへの応答とよく似ている。「劣等感を感じているか」が医療情報で最も高く「誇りを感じている」が低かった。表13aを参照されたい。感覚矯正が

情報の逆で、「劣等感を感じている」はわずかに1名しかいない。表13bに学年別の結果を示した。2年生になると誇りを感じる者が減少し、劣等感をもつ者が微増しているのがわかる。

9) 将来の見通しについて(学科別・学年別)

明るい見通しをもつ者はリハビリがトップで保健看護が続く。卒業後の就職の心配がないからだろうか。見通しを暗いとする者は情報で最も多かった。これらの傾向は誇り、イメージの項と関係が深いように思える。コンピューター

表14a 将来の見通しについて〈学科別, 実数と率〉

	医療福祉		臨床心理		医療情報		臨床栄養		健康体育		感覚矯正		保健看護		リハビリ	
明るい	39	23	18	23	15	15	15	21	9	14	9	17	9	32	17	45
ふつう	90	54	41	52	53	52	41	58	44	67	31	58	16	57	17	45
暗い・不明	39	23	20	25	33	33	15	21	12	18	13	25	3	11	4	11

P&lt;.01

表14b 将来の見通しについて〈学年別〉

	明るい	ふつう	暗い・不明
1年生	90(26.6)	187(55.3)	61(18.0)
2年生	41(15.4)	146(54.9)	79(29.7)

P&lt;.01

を扱う仕事に指向する人のなかに、いわゆる内向性格者が一部いることを示唆しているのかも知れない。以上の結果を表14aに示した。

表14bは学年別の比較である。やはり2年生で「明るい」が減少し「暗い・不明」が増加している。

## 考 察

### 1. UPIの効用と問題点

#### 1) UPIの効用

UPI H群とL群の調査表結果比較は、H群の方に家庭生活および学校生活のいずれにおいても不適応傾向があることを示していた。H群の学生は家庭生活では両親への不満を感じ、批判的・反抗的・無視の態度をとっている者が多い。そして両親が不仲で、家庭は円満でなく暗いと考えがちである。学校生活でも友が少なく、友への感情も陰性的であったり両価的である。学校は自分のイメージに合わず、ともすれば劣等感を刺激する。将来の展望は暗いと考える者が多い。

H群の総数が89名、平均値が23.73だったことは、UPIの分布が左に偏ることを考慮しても、20名以上の適応上のハイリスク者がいることを示唆している。辻本によれば、入学時にUPIを提出して、その後把握された精神障害者の70.5%が20以上の値となった<sup>5)</sup>。今回の調査のハイリ

スク者に何人かの精神障害者がいる可能性も否定しがたい。

以上の事実から、阪大のような入学時にUPIを送付して記入してもらうという方法は精神保険管理上有効であろうと考えられる。学生相談組織と制度を整えばさらにその有効性は増すだろう。

#### 2) UPIの問題点

UPIも質問紙法としての弱点を当然もっている。Lieスケールも4項目しかない。ただしこの4項目は、むしろ判断上別の意味が認められている。問題は私見によれば主としてふたつであろうと思う。まずL群のようにほとんどの項目にチェックをしない者が、果たして精神的な健康者かということである。この群のなかにいるタイプには、①ほんとうに明朗活発で外向的かつタフな心身をもつが、感受性や内省性に乏しい者、②意図的にか、常同的にかこの種の2件法にはチェックをしない者がいるだろう。後者の例として辻本は自殺者の一例をあげている<sup>5)</sup>。チェック数4がすべてLieスケール(UPIでは「いつも活動的である」など)だったそうである。意図的拒否の例と考えられる。また松下の健康管理センターでCMIを施行したところ、最も健康であるとされる第一領域に分裂病者がいたという。常同的拒否のひとつの例である。

つぎにH群のようにチェック数の多い者のすべてが精神的不健康者かということであり、20前後の者のなかには誰が見ても健康者に見える者がいると思われる。このタイプのなかにいる典型的な性格を叙述すると以下ようになる。明朗活発であるとともに、繊細で感じやすく、折にふれて悩む人であって、内省性・思考性にも富んでいる。そして機会があれば内面を吐露

する人でもある。ただし30前後以上になると別問題で、一見健常者に見えても不適應感をもっていたり、たえず不定愁訴の不調を感じている人である可能性が高い。

これらの問題はあるにしても、入学前という時期は特に前記の②に対しては適切な対応期であろう。この時期入学のための必要書類を、入学しようとするならば、書かなければならないと感じるのは社会人として常識である。阪大の回収率はほぼ90%だそうだがそれもうなずける。

## 2. 調査表について

今回の報告では調査表の全項目の単純集計を示すことはできず、主として有意差のあったもののみを提示した。それでもUPIで高い得点をあげた者と、調査表で不適應感をもっている可能性が高いと推測された者との間に有意な関係があることが実証されたと思う。調査表に改善の余地は大いにあるにしても、UPIでハイリスクの可能性の高い者の具体的な不適應感や問題をより明らかにできるし、リスク予測の可能性をより確度の高いものにする効用はあると言っ

## おわりに

この調査は平成6年のプロジェクト研究とし

て企画され、調査は平成7年に実施された。代表であった筆者の病気などの事情で公表が遅れたことをまずお詫びしなければならない。

それはそれとして、この調査結果から学生たちの精神保健管理の必要性は一応明らかにされたと思う。授業中に配布し回収したものであるから、ハイリスクの学生も授業にはきちんと出ていたのであろう。授業に出ない学生のなかには、もっと高率にリスクの高い学生がいることは当然予想できる。入学時に今回と同様な方法でなくてもよいが、なんらかの精神保健管理の基礎資料となるようなデータを入手しておくことは必要ではなかろうか。それは学生に対する大学の責務のひとつであろうと思える。資料を生かす学生相談システムの確立をも含めて、大学は2度とない青年期を送る場として、学生の一人でも多くが充実し、かつ精神的に健康な日々を送れるように配慮すべきである。なお入学時にこの種の調査をした場合、必ず10%前後の不提出者がいると思う。前述のようにこれはこれで、すでに社会的常識の不足という意味で問題行動のひとつである可能性をもつと考えられる。

## 文 献

- 1) 白石純三, 辻本太郎 (1980) 大阪大学学生の精神健康について—10年間を顧みて—, カウンセリング研究, **5**, 41—54.
- 2) 奥田純一郎, 白石純三 (1989) 新入生に対するUPIの成績. 大阪大学保健センター年報, **9**, 143—150.
- 3) 木下 清, 中村妙子 (1981) 看護学生の精神衛生調査 第1報. 大阪府立公衛研所報精神衛生編, **19**, 49—58.
- 4) 木下 清, 中村妙子 (1982) 看護学生の精神衛生調査 第2報. 大阪府立公衛研所報精神衛生編, **20**, 59—62.
- 5) 辻本太郎 (1978) 心理テストによる大学生の精神的不健康予知. 大阪大学医学雑誌, **30**(1)—(4), 179—200.